1/30　マタイの福音書 25 章 1-13 節「目を覚ましていなさい」

小池 宏明 牧師

マタイ福音書の後半、イエス様がエルサレムに来られて、オリーブ山から神殿を見ながら語られた。その中で、イエス様は、「いつ」世の終わりが来て主の再臨が起こるのかは、父なる神様だけがご存知で、その他の誰も知らないと明言されている。(24:36) さらに、イエス様は、結婚の祝宴をたとえに、主の再臨にどのように備えたら良いのかを教えられた。

＊ともしびとは

花婿を迎える花嫁の友人が 10 人出てくる。5 人は賢く、5 人は愚かであった。両者の違いは「ともしび」のために予備の油を用意しているかどうかだ。3、4 節「**愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を持って来ていなかった。賢い娘たちは自分のともしびと一緒に、入れ物に油を入れて持っていた。**」10 人共「ともしび」は持っていた。これは、ランプのことで、花婿（キリスト）を花嫁（教会）の元に導く「しるし」を表す。500 年ほど前の宗教改革以降、教会のしるしとしては、御ことばに基づく説教が為されていること、洗礼式、聖餐式の聖礼典が執行されていること、そして、教会教育（戒規）が行われていることが挙げられる。キリスト者として、この世の人々とは違う塩気の効いた生き方が目印となるだろう。日曜日の朝になると、身なりを整えて、喜び勇んで、集まっては、一緒に礼拝をささげること、共に祈り、賛美をし、聖書の学びと分かち合いなどを忠実な実践することが、この世を照らす「ともしび」としての「しるし」になる。

＊油とは

「油」は「聖霊の働き」を例えている。賢いキリスト者は、主の再臨を待つ日々の生活において、まず目に見える信仰生活を、目に見えない聖霊という深い内面の働きに直結させているのだ。聖霊の働きによって、再臨が遅れても忍耐深く待ち望む信仰生活の継続へとつながる。聖霊の油が、切れてしまった人は、目に見える信仰生活は、みなと同じであっても、次第に色あせて形式的、律法的な生活になってしまう。私たちは、思慮深く、キリストに根ざして、キリストの霊である聖霊なる神様に満たされた信仰生活を歩んでいきたい。

＊いつも準備をしていること

今日のたとえ話の結論は「目を覚ましていなさい」だ。13 節「**ですから、目を覚ましていなさい。その日、その時をあなたがたは知らないのですから。**」これは、いつも準備しておく大切さを強調している。私たちは約束の聖霊を受けているだろうか、聖霊で満たされているだろうかと問われている。